

岐阜大学国際交流委員会 No.23 1998年3月

# NEWS LETTER



(新交流協定校ユタ州立大学の建物と風景)

## 国際交流の推進を願って

岐阜大学国際交流委員会委員長（岐阜大学長） 金城 俊夫

岐阜大学は、現在7ヶ国15大学と学術交流協定を結び、研究者や学生の交流を活発に行っている。その他、交流協定校以外の大学等からも併せて251名の留学生を受け入れている。

今後これらの数をもっと増やし、交流を深める必要があろう。しかし国際交流は量の問題よりその質を高めることがより重要である。特に本学で学ぶ留学生の約60%が私費留学生で、彼ら（彼女）の生活環境は極めて厳しい状況にあり、私たちが少しでも支援でき、勉学に熱中できる環境を整えてやれたらと願っている。

このような願いが広く受け入れられ、多くの企業等から奨学寄附金のお申し出があり、また地域の国際交流団体或いは住民の方々からホームステ

イの引き受けや、各種交流事業へのお誘いをしていただくななど、心温まるご支援、ご協力をいただいている。

このように多くの方々からの善意のご協力なしには、本学の国際交流の質的向上は望めなかったと言っても過言ではない。衷心よりお礼を申し上げたい。

本学では、過日初めてこのようにご支援いただいている団体等の代表の方々をお招きして懇談の場を持ったところであるが、今後、国際交流に関する情報をもっと積極的に多くの方々に提供していくこうということで、広報誌を発行することにした。

国際交流推進の一助にもなればと心から願っている。



## ニュースレターの再スタートに寄せて

学術交流専門委員会委員長（工学部教授）**藤井 洋**

若干のブランクをおいてニュースレターが再び発刊されることとなりました。この間に国際交流関係の組織は、大きく変化しました。平成8年5月「岐阜大学留学生センター」が文部省省令施設として発足したことにより、学長、部局長を構成員とする新しい国際交流委員会が組織され、その下に、学術交流専門委員会及び留学生交流専門委員会の2専門委員会が新たに設置されました。この新しい組織の価値は、岐阜大学の国際交流に対する様々な議論が、今後いかに円滑に具体的行動として実現できるかによって評価されることになります。私は岐阜大学では、「異なった文化的背景をもった人が大学に多く居るということは、大学にとって極めて有益である」という点に関しては十分なコンセンサスが得られていると考えています。我々のいる教育と研究の場にとって、それが外部からの刺激を失い、自らに埋没し、硬直化してしまうほど怖いことはありません。これを避ける最も手っ取り早い方法は、外国の大学や研究所で勉強や研究することで、その経験は、ときにその人の人生観にさえ大きな影響を与える程のものであります。しかし大学の構成員全員がそんな経験をもつことはかなわない。だからこそ外国人の留学生や研究者が恒常に大学において、お互いに刺激しあえると言うことは死活的に重要な認識です。

旧国際交流委員会から継続審議となっていたいくつかの課題についても、すべて上述の基本的考え方に基づいて審議を進めてきました。その結果、昨年5月には、アメリカのユタ大学及びユタ州立大学の2大学との交流協定を無事締結（発効日は6月1日）することができました。これは各委員の熱意と皆様方の協力の賜物と感謝いたします。

一方ベトナムのハノイ工科大学との交流については協定を前提として委員を派遣いたしました。また英国の大学との交流については、適切な大学を調査するため昨年3月に、委員を派遣して検討してきました。現在4大学（ノッティンガム大学、ノッティンガムトレント大学、ダンディー大学、アバディーン大学）を候補大学として選考したところです。同大学との交流実績をお持ちの方はぜひご一報ください。つけても、国際交流に係る国の予算は乏しく、これまで行って参りました協定校との研究者交流助成、広報紙の作成費、協定校への派遣旅費等国際交流関係の諸事業は、各企業等から御協力いただきました奨学寄附金によるものがほとんどであります。本学の国際交流活動を根底から支えていただいております。皆様方の御厚意に対して深く感謝申しあげるとともに、今後とも変わらぬ御支援を賜りますよう切にお願いする次第であります。

## ごあいさつ

留学生交流専門委員会委員長（学生部長、医学部教授）**岩田 弘敏**

平成9年10月現在、岐阜県内の18の大学・短期大学等において、アジアを中心として約40か国から400人程の留学生が勉強しています。そのうち岐阜大学には250人を超える留学生が勉強に励んでいます。一方、年間数人の岐阜大学学生が岐阜大学と学術交流協定を締結している大学に留学しています。このように言語、歴史、風俗、習慣を異なる諸外国の学生と相互協力し、友好関係を築いており、また、開発途上国における人材養成への協力につとめてきております。

岐阜大学では、従来から国際交流を推進するために国際交流委員会を設置しておりますが、一昨年5月、留学生センターが省令施設として発足し、また同時に学生部に留学生課が設置されたのを機会に、従来の国際交流委員会を改組拡充し、学長を委員長とする国際交流委員会のもとに二つの専門委員会ができました。その一つが留学生交流専門委員会で、その業務は外国人留学生の受け入れに関する事、留学生に対する入学後の諸問題に関する事、学生の海外派遣に関する事、その他学生の国際交流に関する事などです。その委員長には学生部長

が当たることになっています。

また、留学生センターには、センター長を委員長とした留学生センター運営委員会や留学生センター交流推進委員会が設置されております。ここでは、日本語や日本事情に関する教育、修学及び生活上の指導・助言、海外留学を希望する学生に対する、修学上及び生活上の指導・助言、学術交流協定校の留学生に関する事などに当たっており、これに関わる事務を学生部留学生課が担当しております。

その他学生部留学生課が事務局として、国際交流会館運営委員会、岐阜大学留学生援助会や県内の機関・団体等で組織する岐阜地域留学生交流推進協議会及び運営委員会などを担当し、留学生への便宜を図ってきております。

このように岐阜大学では、自校のみならず岐阜県全体への留学生の円滑な受け入れの促進と交流活動の推進を図っております。関係各位には今後とも物心両面にわたるより一層のご支援とご協力のほどお願い申し上げたく存じます。



# 国際交流関係の組織と経緯

学術交流専門委員会委員（教育学部教授）小澤 克彦

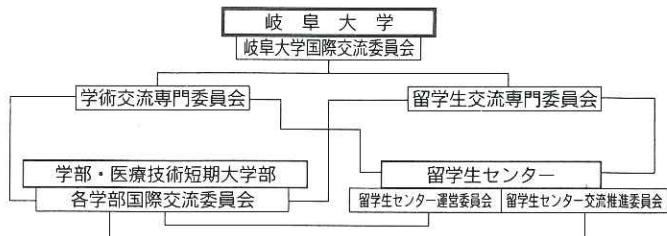
岐阜大学での国際交流は、当然はじめから研究者個人のレベルでは行われていましたが、公の形で行われるようになるのには少し時間がかかりました。留学生を海外に公に送り出すのも、昭和51年位からですから20年位前ということになります。留学生を公に受け入れたのもそのころからだったと記憶しています。

しかし、まだ既存のさまざまの組織を援用して処理しており、国際交流委員会という単一の組織は作られておりませんでした。しかし、交流が盛んになっていくと当然そうした組織が必要になってくるわけで、必要に迫られ「国際交流センター」のごとき組織を将来構想とした一つの「集まり」が教官有志によって、非公式ではありましたがあれ組織されました。後の「国際交流センター」の前身、「国際交流室」の誕生です。しかし、ここは留学生の世話はできても、公の審議機関ではありませんので、学的な認知は得られません。そこで、昭和56年になって「国際交流委員会」が正式に発足することになったのです。それにともない、各学部にも「学部国際交流委員会」の組織が要請されていくことになりました。

こうして10数年、何代かの委員会の大変な努力によって留学生数も増え、海外の交流協定大学も増えていきました。その間、国際交流会館の設置にこぎつけています。そして一方で、文部省令による「センター」の設置構想も本格化していきます。やがて平成に入って

数年が経つと、「省令センター」の設置と同時に委員会そのものの改変の必要を感じていきました。つまり留学生に関する事柄も、また学術交流に関することも、共に膨大な仕事量となり、一つの委員会としては過酷な状態になっていたからです。また、仕事が「海外の大学との折衝」という性格をもっていたため、「岐阜大学を代表して」折衝するという形となり、その責任のとりかたというものも問題と感じるようになったからです。こうして、委員会と、「交流室」から「国際交流センター」へと発展していた組織とは共同して凄まじい仕事に取り掛かりました。結果は平成8年、すでに実現したように、文部省令による「留学生センター」の設置に成功し（その段階で国際交流センターは発展的解消しました。）、また委員会の方も「学長」を委員長とする「国際交流委員会」と「学術交流専門委員会」と「留学生交流専門委員会」の子組織の三部組織へと改編、新たな出発となったのです。

## 国際交流関係の組織図



## 岐阜大学留学生センターについて

留学生センター長（留学生センター教授）中須賀徳行

岐阜大学には以前から国際交流室があり、日本語補講や国際理解教育、あるいはサマースクールなどを実施して留学生の諸君に親しまれて来ました。平成7年の4月には国際交流センターと改称しましたが、ついに、一昨年5月11日、留学生センターが省令施設として発足しました。これはひとえに先輩諸氏の奮闘の賜であり、また何かと応援して下さった地域の方々や関係各位のご努力によるものです。

名称は岐阜大学留学生センターとなっていますが、岐阜大学だけに留まらず、全国共同利用的な面を持っています。すなわち、他の大学も含めて、大学院へ進学予定の国費外国人留学生を半年間預かり、初級日本語を徹底的に集中訓練する予備教育がこのセンターの大きな役割なのです。もちろん日本語補講も従来通り実施し、参加者もこの一年間に増えました。

新しく付け加わった業務に、留学生に対する研究・生活上の指導・助言を行うことがあります。専任の教官も赴任

して、様々な問題を抱えた留学生が連日相談室を訪れてきています。

また、留学を希望する本学学生に対して、指導・助言を行うことも仕事の一つで、短期留学派遣や情報提供、受け入れ大学との折衝などを行っています。

従来の国際交流室員に代わって交流推進委員が配置され、5名のセンター専任教官とともに夏期短期留学プログラム（サマースクール）等を実施しています。ただこうしたプログラムや日本語教育を実施するにも教室がなく、工学部、地域科学部、連合大学院、大学会館などをお借りしてやっているのが実情です。

国際交流や留学生教育の量的発展から質的発展への転換が唱われる現在、センターもその一翼を担うことができればと念じていますが、皆さんに大いに活用していただくとともに、一層のご鞭撻とご協力をお願いする次第です。

# 1997年度日本留学フェア（韓国、台湾）に参加して

学術交流専門委員会委員（農学部助教授）田中 逸夫

日本留学フェアは、文部省の外郭団体である（財）日本国際教育協会の主催により、海外において、現地の高校生・大学生・進学指導担当者等を対象に、日本への留学の促進を目的として平成元年より毎年行われているものです。韓国および台湾での開催はいずれも3回目（本学は昨年度も韓国に参加）です。以下、今回参加した韓国および台湾での模様の概要を報告いたします。

## －韓国－

10月13日（月）・14日（火）（両日とも12時から20時まで）ソウル市内のHotel Lotteにおいて開催されました。日本からは71大学（国立18大学、私立52大学）、3機関の総勢約140人（本学からは1名）が現地に参加し、来場者数は2日間で延べ約1600名でした。本学ブースでの相談件数は約20件（有名私学や京都大学等を除いて、ほとんどの大学でこの程度）でした。希望コースで分類すると、日本語教育、経営管理（企業経営）、経済学が比較的多く、その他は法学、半導体工学、燃焼工学、獣医学等で、ほとんどが修士課程入学希望者でした。

相談内容は、学びたい研究分野の先生の名前と具体的な研究課題の検索、入学までの手順、入学試験の時期、授業料・入学金、生活費、寮の有無、アルバイト等の問い合わせでした。

## －台湾－

10月18日（土）・19日（日）（両日とも10時から17時まで）台北駅コンコースにおいて開催され、来場者数は

2日間で約3000名（日本からの参加機関、人数は韓国と同じ）と多く、日本に対する関心の大きさを実感しました。本学ブースでの相談件数は約40件あり、希望コースとしては日本語教育が圧倒的に多く、事前に聞かされていたとはいえ驚きました。台湾には日本語学科を有する大学があるため、日本語教育・日本文学・日本史を希望する学生（修士課程入学希望者）が多いとのことでした。彼らの多くは、将来、日本語教育の先生、通訳、翻訳者になることを希望していることです。

その他、造園関係、園芸、獣医、医学、機械設計、企業管理、経済学、社会人（短大卒）の3年次編入、日本語教育の学部入学希望者がありました。

相談内容は、韓国の場合とほぼ同じでしたので割愛します。

最後に両フェアを通じての感想としては、韓国は非常に発達した国であり、日本に対する期待度は小さく、逆に対抗意識が強いようです。そのため、むしろ米欧への留学希望が強いようです。台湾は、非常に親日的で、台北で見た自動車のほとんどが日本車であることに象徴されるように、日本との交流に強い期待を持っているようでした。しかし、台湾の複雑な事情もあってか、日本の国立大学との学術交流や国費留学が非常に少ないとのことでした。

今回留学フェアに初めて参加して、留学生に対する援助や理解の重要性を改めて強く感じている次第です。

## 交流協定校の紹介

### ユタ大学（University of Utah）と ユタ州立大学（Utah State University）について

学術交流専門委員会委員（医学部附属病院講師）安岡 忠

ユタ大学（University of Utah）は1850年に創立され、ユタ州の州都であるソルトレイクシティー（Salt Lake City）に本部を置く15学部67学科より構成される州立総合大学である。その名称よりU of Uというニックネームで親しまれている。医学部、薬学部や看護学部からなる健康学部を擁しアメリカ合衆国の中西部の医療の中核を担っており、病院にはヘリポートも設置されており、ユタ州のみならず近隣の州からも緊急患者を受け入れているそうである。臓器移植も積極的に行われて

おり、われわれが訪問した数日前にも日本からやってきた患者が心移植術を受けたとのことであった。ユタ州には歯学部は無いが、オレゴン州のオレゴン大学にあり、オレゴン州には医学部が無いという具合に、大学の学部構成も同じユタ州立のユタ州立大学のみならず、近隣の州の大学とも相補的に行っているようである。その他大学の付属施設とは思えないような美術館もあり、大学関係者のみならず一般にも開放されており州内の小学校の課外授業にも利用されていた。

ユタ州立大学 (Utah State University) はソルトレイクシティの約70マイル北方のローガン (Logan) にあり、もともとland grant大学（農科大学あるいは工科大学の設置を条件に、無償で連邦政府より国有地を州に払い下げを受けそれを基に設立された大学）の一環として、1888年に創立された農科大学 (The Agricultural College) で、その後ユタ州立農科大学 (Utah State Agricultural College) と改称され、さらに学部・学科を増設し1957年に現在の名称になった関係で、長らく Agricultural College (農科大学) という名称から大学関係者あるいは地元住民より Aggie というニックネームで親しまれている。(岐阜大学のそもそもその発祥は岐阜高等農林専門学校に遡る関係で今は各務原市市民公園になっている那加の旧岐阜大学本部を地元のお年寄りが農大と云うのとよく似ている。因みに旧本部付近にある高山線の踏切を現在でも農大1, 2号踏切と呼ぶようである。) 8学部41学科より構成されているが、われわれが訪問した限りでは広大な農場を擁する伝統の農学部と宇宙工学研究所 (Garn Space Dynamic Laboratory) が印象的で

あった。特に宇宙工学研究所は米国航空宇宙局 (NASA) との共同開発で人工衛星などの製造も行っているようである。

ともにユタ州の州立大学であり、先にも述べた相補的な運営を行うために共通の委員会も設置されているそうである。また両大学とも黒人などカラードの学生が占める割合が低く、10%以下とのことでこれは全米でも非常にまれなことだそうである。われわれ日本人にとってユタ州というとどうしてもモルモン教のイメージが強いが、大学の中では特に布教活動などを行わせておらず、強いてソルトレイクシティにモルモン教の本部があると言わなければ分からぬようである。しかしモルモン教の信者、特に男性にとって布教活動は非常に意気に感じるようで、市中を歩くと日本に布教に行ったことを懐かしんで話しかけられることはある。いずれにせよ両大学とも広大なキャンパスを擁し勉学のための設備が充実しており、さらにゴルフ、スキーやキャンプなど余暇を快適に過ごす施設もあり羨ましい限りである。

## 在外研究報告

# ノーザン・ケンタッキー大学訪問記

教育学部教授 市川 紀男

私は1996年夏季2か月の間ノーザン・ケンタッキー大学に客員研究員として訪問いたしましたが、このような機会を与えてくださった関係機関に、そして費用を提供してくださった企業体に感謝の意を表したいと思います。

大学は岐阜市の姉妹都市オハイオ州シンシナティとはオハイオ川を挟んで南対岸に位置するハイランド・ハイツという小さな町にある。町は、その名のごとく、丘陵地にあってアップ・ダウンがはげしい。大学の周辺は、田園地帯が急速に新興住宅地に変貌しつつあった。大学の正門は高所にあり、そこからキャンパスが下り坂になって眼前に広がる。正面の方向遠くにシンシナティの高層ビルが小さくかたまって見える。キャンパスはかなり広く、建物と駐車場ばかりが目立つ。周囲には森がひろがっているのに、ここだけがむきだしになっているからだ。大学の設立が1968年で比較的新しいからかも知れないが、やはり田舎の大学のキャンパスには茂った大木がよく似合う。しかし、私に貸し与えられた家は左右には大小の木が生えており、裏が急斜面に下がって大学との間にある森に接している。ロビンが木に巣をかけ、野うさぎが姿をみせ、ときには勝手口まで訪れて愛敬をふりまく。

大学の研究室や図書館は夏季休暇のせいもあって人気も少なく静かだ。ただ困るのは冷房の効き過ぎだ。全館

集中冷房システムのため自分では調節ができない。せめて私の研究室だけはなんとかしたいと思い、セロテープで吹き出し口を目張りした。しかし効果はあまりなかった。というのは、入口のドアの下に隙間があってそこから冷気が吹き込んでくるからだ。他の先生方も聞けば肌寒いと答えるし、中にはくしゃみをしたり、ケープを肩にかけている先生もいる。私の知るかぎり、他の大学も同じなのだ。こんなエネルギーの無駄をしていながら CO<sub>2</sub>を減らせないとはアメリカもなにを考えているのだろうか、なんてそのときは考えず、ただ自己防衛のためネルのシャツとトレパンをスーパーから買ってきてジャケットとズボンの下に着けることにした。しかし戸外はうだるほど熱い。歩いているものは少ない。思えば夏休みだった。

八月末新学期が始まるころになると、涼しくなり、キャンパスも新入生のガイダンスでにぎやかになる。父母同伴は日本と同じ、それが数日続くのである。

## 外国人留学生からのメッセージ

# 1年半の留学生活を振り返って

韓国教員研修生（教育学部研究科）朴熙喆 パク ヒ チョル

1996年10月2日韓国から一緒にきた17名の他の教員研修留学たちと大阪国際空港ホテルの一室で「これから1年半の日本での留学生活を充実したものにしよう」と乾杯したのが昨日のことのように思い出される。あれからもう1年2ヶ月が過ぎた。あっという間に過ぎてしまった歳月であったが今、振り返って見ると私の人生の中で本当に忘れられない1年6ヶ月になるだろう。



まだ日本での生活になれていなかった頃岐阜での生活を円滑に送ることができるよう色々なものごとについて親切に教えてくださった留学生センターの事務の方々、専門分野における研究活動に対応できるよう一生懸命日本語を教えてくださった先生方にも感謝の気持ちを述べたいと思う。

岐阜大学での1年半の留学生活は一生に一度の機会になるかもしれないが岐阜大学での留学生活を通じて学び、感じたことについて3つ述べたいと思う。

まず当然のことながら専門の研究についてである。私は教育研修生として最初の6ヶ月は日本語の教育を受け、昨年4月から教育学部の石川先生の元で日本の教育方法学と子ども1人1人の個性が生きる教育について研究している。進んだ日本の教育制度や教育方法の研究は非常に勉強になっている。今後は国を越えて教育実践につい

て共に考えていくことが重要になってくると思うのでこの留学を契機として国へ戻ってもまず日本で学んだことを活かしてよりよい方法を模索していきたいと思う。

2つ目は他の留学生との国際交流である。私は現在国際交流会館で生活しているが世界中からの留学生との付き合いを通して各国の文化や慣習を理解できるようになった。また世界に目を向けられるようになり柔軟な考え方ができるようになった。これは留学生活から得られる貴重な宝物であると思う。韓国へ帰っても今付き合っている人の国を訪問する計画も立てているがこういう関係が継続していくべきが生きている国際交流につながるのではないかと思う。

3つ目に1年半の留学生活を通して自分自身を振り返る余裕を持てるようになり、あらためて自分自身の価値観を見直す機会を持てるようになった。国の中で考える「自分」「家族」「社会」「教育」「国家」は非常に近視眼的にしかとらえることができないが國を離れて第3者の客観的な立場で眺めるそれとは非常に違うことに気づいた。

私は今年3月に国へ戻るが日本での留学生活の中で学んだことを積極的に活かしたいと思っている。日本へ留学したかいがあったと思えるように国へ戻ってから以前よりさらに頑張りたいと思う。

留学生の皆さんに最後に一言。

「研究も生活も充実させて日本の留学生活を心から楽しもう!!」

## 国際交流と日本留学

連合大学院農学研究科 鄭新淑 テイ・シンシュク (中華人民共和国)

今、日本では世界中から大勢の留学生がやってきて、各自の専門分野の勉学や研究などに取り組んでいる。私たちは日本に来て、日本の先進的な技術、進んだ専門知識を習うことができたことをとても嬉しく思っている。留学と言うと、単に専門知識の勉強あるいは研究だけにこだわりがちだが、それでは充実した留学と言えな



い。人と人との交流を国境を越えて経験することも必要だ。現代の通信技術は高度に発展しており、情報交流の手段も豊富である。そのため、情報の収集は簡単・迅速化されており、国と国との間は相互的によく知り得ていると思われるがちだが、現実的にはそうではなく、心の交流は案外閉鎖的と言える。典型例として挙げられるのは中国と日本の交流である。両国は隣国であり、歴史的にも長い間さまざまな交流を続けてきた。しかし、現在は情報伝達が正確ではなく、お互いに相手のことや文化についての理解がまだまだできていないと思う。これは、

両国の経済、学術などの交流において深刻な問題もある。留学の機会に恵まれた私たちは、日本人との直接な交流を積極的に進め、日本を正しく知ると同時に私たちの国のこととも知ってもらい、交流を深めていくべきである。私たちはその重要性をしみじみと感じており、自分たちに与えられた歴史的な使命ではないかとさえ思う。世界中の人々の心を結びつけ、恒久的な平和を保つことは、自然に訪れるだけでなく、ごく一部の政治家の力、政府の交渉によってできることでもなく、全国民によって初めて実現することだと思う。私たちは、日本政府の支援や地域の人々たちの協力を頂いて、自分の勉強を頑張ることも大切であるが、世界の人々が私たちに期待していることはそれだけではないことを痛感しなければならない。

### 留学体験記

## 私のアメリカ留学

教育学研究科英語教育専修 田口 順子

留学という貴重な体験は英語力の向上だけではない様々なものを見たりしてもらってくれたように思います。毎日の生活が新しい発見の連続であったためかあっという間の1年でした。私が通っていたノーザンケンタッキー州立大学は岐阜市の姉妹提携都市であるオハイオ州シンシナティ市のダウンタウンから車で20分ほどのところにありました。冬は寒さがとても厳しいのですが秋の紅葉はとてもすばらしくどこへいっても赤や黄色に色づいた木々が青い空に映えていました。

大学での生活はとても充実したものでした。定期的にテストや課題があるため勉強は大変でしたが歴史の授業ひとつをとっても日本とは違う視点からとらえてあつたりと内容は非常に興味深いものでした。また一般のアメリカ人学生と共にくる授業では意見を求められることもあり、かなりの緊張感がありました。しかしどれだけたくさんの意見を頭の中に持っていてもそれを上手く表現できない自分の英語力のなさに悔しい思いをしたこともしばしばでした。同じクラスにはスペイン、ケニア、香港、パキスタンなど世界のあちこちから生徒がきており、普通におしゃべりをする中でもいろいろな価値観にふれたような気がします。また留学生だからといって特別扱いされることで返って勉強は自分でするものなの

らない。もっと日本の社会に積極的に入り、文化にとけ込んで、本当の日本の気持ちを味わうべきである。これこそ本当の国際交流であり、人類への大きい貢献である。土地、風俗および文化の違いで苦労することは多いが、小さな私たちは一層頑張って国際交流の大きな架け橋になれば、この世の中がますます明るくなることだろう。それを見ることができた時の私たちの嬉しさは、今の苦労とは比較できないくらい大きいと思う。また、そうすることにより良い思い出がたくさんできるだろうし、自分たちもきっと生長して、もっともっと充実した留学になるだろう。留学生の皆さん、力合わせて頑張りましょう。

だという基本的なことを改めて考えさせられたように思います。

各行事（ハロウィンやサンクスギビング、クリスマスなど）を通してアメリカの家庭での習慣や風習に直に触れたことも違う文化を理解する上で貴重な経験となりました。サンクスギビングではターキーを食べ、クリスマスには家族みんなでテーブルを囲み、まるで日本のお正月のような雰囲気で楽しく過ごしました。なにより私を暖かく迎えてくれたことをとてもうれしく思いました。

この留学によっていろいろな考え方や価値観を受け入れること、他力本願では何も得られないことなどを学んだような気がします。そうした中で日本人、または日本の良さを再認識することも出来ました。これは留学しなければ考えもしなかったことかも知れません。アメリカという異文化の中での生活は私にとって非常に大きな影響を与えてくれました。今後もこの貴重な体験を大学での研究やその他の取り組みへも積極的に生かしていくたいと思います。

（'95.8～'96.6 ノーザンケンタッキー大学（USA）留学）



# THANKS MATE!!

教育学研究科英語教育専修

川嶋 香織

私にとってのオーストラリア留学は、私の国日本を見詰め直し、他の国々への架け橋を作るきっかけを与えてくれた貴重な体験となりました。

大学には留学生用コースも、英語を学習できる場もなく、私は初めての日本からの交換留学生としていきなりオーストラリア

ア人学生が受ける教室の中に放り込まれました。日本のように困っていると誰かが助けてくれる訳ではなく、自己主張し自分から動かないと相手にはしてもらえませんでした。そこで私は、オーストラリアと日本の教育の相違を発見したいと考え、教員養成学部の授業を履修したり、幼稚園・小学校（1～7年生）・高校（8～15年生）、英語・日本語の語学学校を出来る限り訪問し、授業のお手伝いをさせてもらったりしました。

発見は数え切れないほどでした。まずオーストラリアにおける日本語教育の加熱ぶりには目を見張るものがありました。日本にたいへん興味を持ってくれ、どの学校に行っても私は日本人として歓迎されましたし、テレビ番組やCMでは日本の物が多く引用されていたのにも驚かされました。大学の授業でのプレゼンテーションで日本における英語教育と題して実際の教科書を用い、中学生を対象に模擬授業を行った時も好評で、オーストラリアにとって日本が戦争相手国からビジネス相手国へ、さ



らには同じアジアの国の一つとして友好国へと発展してきているのを感じました。教員養成大学で勉強する内容は両者ともよく似ていましたし、学校現場が抱える問題点—いじめや不登校、体罰、非行問題などは世界中どの国にもあるであろうことを知りました。また個性重視のオーストラリアと助け合いの日本の両者に長所と短所があり、どちらに優劣がある訳でもないということも感じました。

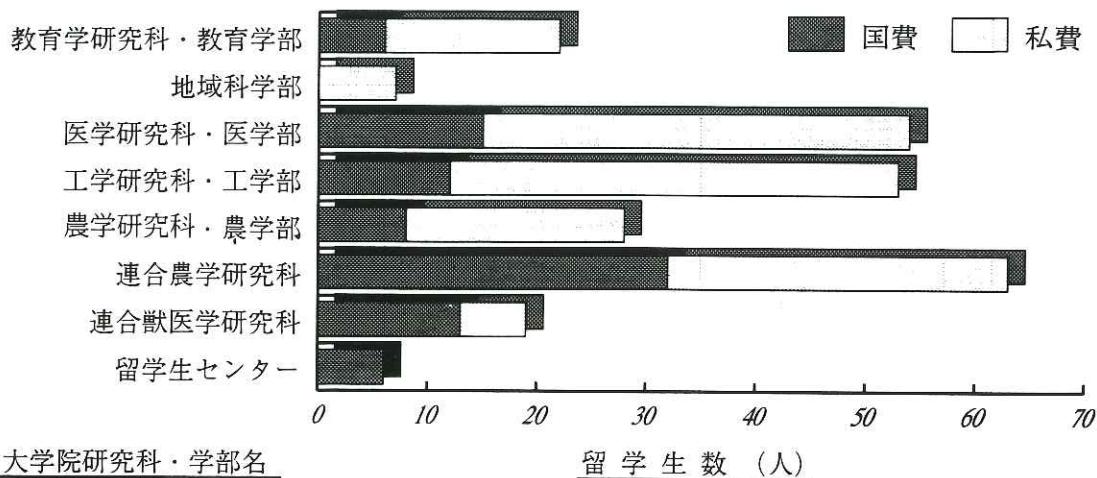
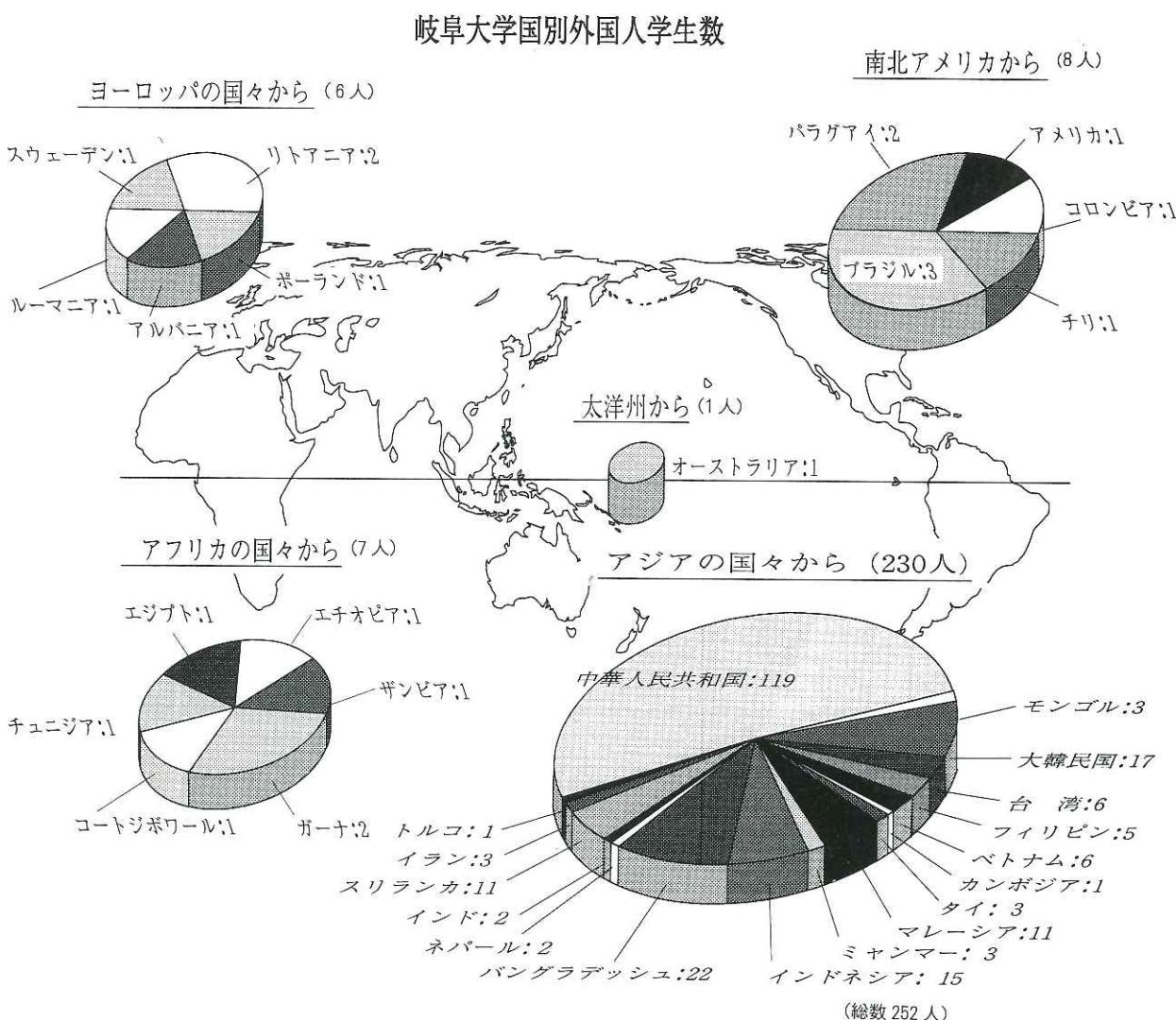
燐燐と輝く太陽の下数kmにも及ぶ砂浜を前に友と波乗りを楽しんだり、10数時間かけてバス旅行をしたり、動物と戯れたり、ホストファミリーと夏のクリスマスを過ごしたりと楽しい思い出の反面、意志疎通がうまくいかないなどの挫折感、日本人であるがゆえの差別など人生における貴重な体験が出来、全てが自分を高めてくれたと感じています。私はこの体験を通して、国籍・人種などに関係なく、人として私達は同じように悩み、考え、前進しようとしている。そんな中でお互いを理解しあい、共に生きていくことが大切であると思うし、私はこれからも様々な人と出会うことでその架け橋になれたらと考えています。（'95.7～'96.6 グリフィス大学（オーストラリア）留学）

## 岐阜大学外国人研究者受入数

(H 9. 12. 1現在)

学部名	教育学部			地域科学部			医学部			工学部			農学部			小計		合計
	区分	私費	委任経理金	その他	私費	委任経理金	その他	私費	委任経理金	その他	私費	委任経理金	その他	私費	委任経理金	その他費用		
人 数	2 (1)	0	1 (1)	0	4 (3)	1	1	6 (2)	2 (1)	3	10 (6)	10 (2)	20 (8)					

( ) 内は、女子を内数で示す。



## 国際交流奨学寄附金協力団体等一覧

(平成9年12月現在)

団体等名称	代表者氏名	住所	備考
株式会社十六銀行	清水 義之	岐阜市神田町8-26	
岐阜信用金庫	音瀬 晴夫	“ 神田町6-11	
株式会社大垣共立銀行	土屋 嶽	大垣市郭町3-98	
岐阜瓦斯株式会社	植村 稔	岐阜市加納坂井町2番地	
大日本木株式会社	甕 哲司	“ 宇佐南1-6-8	
財団法人田口福寿会	田口 利夫	大垣市田口町1番地	西濃運輸
イビデン株式会社	遠藤 優	“ 神田町2	建築材料等の製造販売・開発
太平洋工業株式会社	小川 信也	“ 久徳町100番地	自動車部品、制御機器等の製造販売
岐阜車体工業株式会社	星野 鉄夫	各務原市鵜沼三ッ池6-455	輸送用機械器具部品等製造・販売
中部電力株式会社岐阜支店	森本 正	岐阜市美江寺町2-5	
サンメッセ株式会社	田中 康義	大垣市久瀬川町7-5-1	総合印刷業
医療法人東山会長良川病院	森省三	羽島市竹鼻町梅ヶ枝町370-1	
株式会社スギヤマメカレトロ	杉山 三郎	本巣郡糸貫町数屋1053-12	各種工作機械修理、改造
日本耐酸塗工業株式会社	堤俊彦	大垣市中曾根町610	各種ガラス製品の製造販売
国際ソロブチミスト岐阜	地守 素子	岐阜市東金宝町1-12 医療法人和光会山田病院内	国際交流団体
岐阜乗合自動車株式会社	伊藤 龍男	岐阜市神田町9-1	
株式会社市川工務店	市川 治徳	“ 鹿島町6-27	
昭和コンクリート工業株式会社	村瀬 恒治	“ 明徳町10番 地杉山ビル	
株式会社文済堂	水谷 雄二	羽島市江吉良2801	教育用図書、教材教具製造・販売
岐阜プラスチック工業株式会社	大松 利幸	岐阜市神田町9-25	
バイオニア貿易株式会社	桐山 芳春	“ 茜部大川1丁目88-2	貿易(機器)
岐阜県農業協同組合中央会	大池 裕	“ 宇佐南4-13-1	
河合石灰工業株式会社	河合 進一	大垣市赤坂町2093番地	
長谷虎紡績株式会社	長谷 和治	羽島市江吉良町197の1	
東海旅客鉄道株式会社	葛西 啓之	名古屋市中村区名駅1-1-4	
コーテック株式会社	朝田 晃年	大垣市米野町3-30	衣料素材、産業資材等の染色・接着等の特殊加工
株式会社KVK	北村 和弘	岐阜市黒野308	金属加工材料
株式会社後藤瞬卵場	後藤 静彦	岐阜市西野町7丁目北町13	
矢橋工業株式会社	矢橋 慎哉	大垣市赤坂町188-1	石灰等製造販売
ユニオンテック株式会社	安部 二郎	岐阜市中鶴1-30-1	建築総合設備
岐阜精機工業株式会社	皆嶋 寛治	岐阜市六条南1-9-6	自動車関連部品、家電部品、金型製造販売

(順不同)

### ◆編集後記

岐阜大学国際交流委員会発行のニュースレターをここにお届けいたします。

本誌は、旧国際交流センターのニュースレターを継承するもので、継続数である23号となっています。平成8年、留学生センターの設置に伴って拡充されました本学の国際交流組織の運営も軌道に乗り、その最初のニュースレターの発行に至りました。本誌表紙は記事にもありますように、新組織になって最初に交流協定が締結されましたユタ大学とユタ州立大学に因んだ写真です。本誌を通じて、学内はもちろん広く学外の方々にも、本学の国際交流の現状と目指す方向を知っていただければ幸いです。そして、岐阜大学における国際交流活動をさらに推進するために、皆様方の一層の御協力をお願いいたします。

また、より良い広報誌としていくため、職員・学生の皆様からのご意見・ご要望をお寄せください。それでは、今後ともよろしくお願ひいたします。

宛先：庶務部庶務課研究協力室（事務局1階）

国際交流係 (Tel 294-2141, Fax 293-2022)

編集者：学術交流専門委員会：小澤克彦（教）、内田 勝（地）

留学生交流専門委員会：藤田裕一郎（工）、三浦陽一（留セ）

事務局・学生部：清水靖人（庶）、粥川美重子（庶）、田立祥夫（留）